

【16】 炉心の状況に関する公表について

福島第一原子力発電所の炉心損傷事故に関連して、メルトダウン（炉心溶融）等の炉心損傷具合に関心が高まり、当社に対しても「炉心の状況を認識しておきながら、メルトダウン（炉心溶融）は発生していないと言い続けたのではないか、隠したのではないか」との指摘がある。

しかしながら、メルトダウン（炉心溶融）という用語は、具体的にどのような状態を指すか定義が定まっておらず、個人によって受け止め方が様々であるため、当社は、炉心の状態について「燃料損傷」、「燃料破損」という用語を用いて説明を行っているが、溶融も含めてその可能性は否定していない。

また、その後、用語の定義整理や、水位計の校正、MAAP解析による炉心状態の評価を踏まえ、その都度、出来る範囲で状態をイメージできるような平易な言葉で説明してきた。

実際にどの様に公表がなされたのか、その対応等に関する確認事実を、以下に記す。

【確認事実】

○ 当社の記者会見発言

- ・ 現在確認されている水位では、燃料の頂部で若干燃料の損傷がある可能性は否定できない。（3/12 記者会見）
- ・ （燃料が損傷した可能性を認めるのかとの質問に対して）自然状態より高いレベルの放射能が出ているので、燃料が損傷したとみている。（3/14 記者会見）

《3月20日以降、採取した発電所敷地内の空気中等から、ヨウ素、セシウム、テルル、ルテニウムなどを検出》

- ・ おそらく燃料が損傷して出てきたものと考えている（3/25 会見）
- ・ （燃料破損の程度については）実際どの程度破損しているかは不明（3/27 会見）
- ・ （原子力安全委員会などで「溶融」という言葉を使い始めているが、東電はそうではないと考えているのかとの質問に対して）そうである・そうでないと具体的に判断、断定するだけの材料がないということ。（3/28 会見）
- ・ （現時点のデータから、燃料が「溶融」まで行っていないと考えているのかとの質問に対して）破損している可能性が高いということはデータからも読み取れるが、判断材料が乏しいので、破損の量・程度までは分からない（3/28 会見）

《3月28日、プルトニウム検出》

- ・ 核分裂に起因するものであり、燃料損傷の可能性については否定できない。（3/29 会見）

○ 4月10日、当社より経産大臣に1号機～3号機が炉心溶融しているが、

その程度については、評価できないと説明。その場において、経産大臣、保安院、東電の間で用語の定義が曖昧であることに関する議論を実施。その結果、「炉心溶融」という言葉を使わずに「燃料ペレットの溶融」を使うように経産大臣より指示あり。

○ 当社の記者会見発言

《4月18日、保安院が原子力安全委員会にて「炉心損傷の定義整理」「ペレットが溶融、深刻な損傷が起こったとの推定結果」を報告》

- ・(炉心溶融は考えていないのかとの質問に対し) ペレット等が一部溶けて被覆管からむき出しになっていることはあると思うが、そういった状況については確認できておらず、溶融という言葉は人によってイメージが異なるため、当社としては炉心の損傷ということで用語を統一している。(4/20 会見)
- ・70%の炉心損傷と評価して「炉心溶融ととらまえていない」ということではなく、現時点できちんと確認できていないので、被覆管が破れているケースもあるし、温度が高くなってペレットが溶けているケースもあるが、損傷の度合いとしては約70%とお伝えしたものの。(4/20 会見)
- ・(これまで「溶融はあるのか」との質問に対し「損傷はある」と回答していたが、それは溶融があることを否定したものではないとの理解かとの質問に対し) そのとおり。炉心全体あるいは一定の部分が溶けて落ちているかはまだ分からず、決して否定するものではないが、状況ははっきりとしない中で、溶融があったか無かったかというよりも、損傷の程度として70%が測定結果から分かっているということ。(4/20 会見)
- ・溶けた燃料がたまっている可能性はあると思う。(4/24 会見)

《5月12日、当社は「1号機の原子炉圧力容器内の水位計を点検・調整した結果、水位は燃料棒の上部より約5m低かった」と発表》

- ・燃料集合体は、実際には元の位置にはないと思っている。しかし、燃料の損傷の具合は確認できておらず、圧力容器の下部にあるのか、ある程度形状を保ったまま少し下の方にずれているのかは確認できていない。(5/12 会見)
- ・燃料集合体の位置が、正規の位置より下もしくは圧力容器底部に達しているものと考えている。しかし、燃料集合体がどの程度の状態で圧力容器の底部にあるかは確認できていない。燃料集合体が溶けて下にあり、そこで冷やされている状態であると考えている。(5/12 会見)
- ・チャイナシンドロームのように圧力容器、格納容器、原子炉建屋を抜けていくという状況ではなく、形状は維持していないものの圧力容器内に留まって冷えているものと考えている。(5/12 会見)

《5月15日、当社はMAAP解析による炉心状態の評価を公表》

- ・解析の結果、1号機は津波到達後比較的早い段階において、燃料ペレットが溶融し、圧力容器底部に落下したという評価となった。

以上